

Title	高頻度複合動詞と中上級レベルの論述文指導に必要な複合動詞： 22後項動詞を指標としたBCCWJ「書籍」資料の調査結果に基づいて
Sub Title	
Author	村田, 年(Murata, Minori)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2024
Jtitle	日本語と日本語教育 No.52 (2024. 3) ,p.35- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0035">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0035</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 高頻度複合動詞と中上級レベルの 論述文指導に必要な複合動詞

—22 後項動詞を指標とした BCCWJ「書籍」資料の  
調査結果に基づいて—

村 田 年

## 1. はじめに

筆者は、村田・山崎（2012）ならびに村田（2013, 2015）において、BCCWJ（2009 モニター版）の「書籍」資料の3つのジャンル（自然科学/技術・工学、社会科学、文学）を対象に、22の複合動詞の後項動詞を指標として、その使用頻度調査を行ってきた。村田（2016）では、調査結果の見直し（用字問題、誤検索など）を行い、修正を加えた結果を報告した。村田（2020, 2021）では、使用頻度上位語の複合動詞の中から「押しつける」を取り上げ、その用法を実例に基づいて分析し、指導方法を提案した。また、村田（2023）では、後項動詞「つける」を持つ統語的複合動詞の用法について分析を行った。

これら一連の研究を進めてきた理由は、レポートや論文などの論理的な文章、いわゆる論述文を書くための中上級レベルの文章指導を念頭に置き、一般的によく使われる複合動詞にはどのようなものがあるのか、また、それらは論述文によく使われる複合動詞とはどの程度異なるのか、さらに制約のある授業時間内にどのような複合動詞を優先して取り上げるべきかということを、大規模コーパスを用いた使用頻度調査に基づいて選択したいと考えたためである。

本稿では、上記3つのジャンルにおける使用頻度上位後項動詞を含む高頻度複合動詞を比較対照し、その結果を踏まえて、中核と考えられる高頻度複合動詞群ならびに論述文指導の場で優先して導入すべきだと考えられる複合動詞群のリストを提案したいと思う。

姫野（1999, 27/2018, 28）<sup>1)</sup>は、外国人の日本語学習者が上級までに習得するのが望ましい語としてかつて挙げた57語（72種）について、基本的なものはもっと絞ってその半分程度でよいのではないかと述べている。筆者は、使用頻度を主たる指標とした複合動詞の選択を考えているので、選択基準は異なるが、中核と考えられる複合動詞の数がある程度限られていることは、これまで筆者が行ってきた研究からも裏付けられる。高頻度複合動詞の数が限定されるということは、論述文指導のために必要とされる複合動詞の数もそれほど多くはないと推測される。ちなみに、村田（2013）で報告したように、自然科学/技術・工学ジャンルと社会科学ジャンルの2つのジャンル間で後項動詞「あう」「だす」「こむ」を含む使用頻度上位8語を比較した結果でも、半分以上の複合動詞が共通していた。

本稿では、使用頻度調査で延べ数、異なり数ともに複合動詞が最も多く使われていた文学ジャンルを加え、3つのジャンル間で後項動詞ならびに複合動詞を比較対照する。これにより、各ジャンルの複合動詞の特徴がより一層明らかになると考えられる。

## 2. 研究方法

### 2.1 資料と指標

資料は、これまで使用頻度調査に用いてきたBCCWJ（2009モニター版）である（山崎2009）。その理由は、筆者が複合動詞の使用頻度調査を開始した時のデータがモニター版のものであったことによる。なお、本稿で扱う書籍データについては、山崎も、村田・山崎（2012, 85）の中で2012年にバージョンアップされる予定の版との差異は極めてわずかと述べてお

り、モニター版とその後の普及版に大きな差はないと考えている<sup>2)</sup>。

指標については、村田（2013, 2015, 2016, 2022）で用いた 22 の複合動詞の後項動詞を用いる。この指標の選択については、村田（2022, 102-103）に詳しく記したので、ここでは省略する。22 の指標は以下の後項動詞である。

あう、あがる、あげる、あわせる、いる、入れる、かかる、かける、きる、  
こむ、こめる、だす、たつ、たてる、つく、つける、でる、とおす、なおす、  
なおる、ぬく、まくる

BCCWJ（2009 版）の「書籍」資料の中の 3 つのジャンル（自然科学/技術・工学、社会科学、文学）に現れた 22 の後項動詞を含む全ての複合動詞を対象とした使用頻度調査については、各ジャンルで 30 回以上使われた複合動詞にどのような語があるのかを表にして報告した（村田 2016, 122-129）。本稿では、その後の確認作業で見つかった誤検索等のミスを修正した現時点での最新の使用頻度調査結果を用いる<sup>3)</sup>。

## 2.2 上位後項動詞を含む高頻度複合動詞の選択方法

3 つのジャンル間で比較を行うために、ジャンルごとに 22 の各後項動詞の使用頻度を使用率で表す。使用率は、各ジャンルで使用された 22 の後項動詞全体の総使用数に占める各後項動詞の使用数とする。その使用率から、後項動詞の上位語を選択する。

次に、その上位後項動詞を含む複合動詞にはどのような語があるのかをジャンルごとに見ていく。上位語については、上位何語までをその範囲とするかは判断が難しいが、村田（2015, 77）で報告したように、22 後項動詞の上位 8 語の延べ使用数を見た時、16 後項動詞（但し 6 動詞「こむ、まくる、あう、だす、きる、たてる」は除く）については、3 つのジャンルのいずれにおいても、上位 8 位までの複合動詞で全体の 50% 以上の使用数を占めていた。この結果も考え合わせ、上位複合動詞の選択については、

便宜上、上位 10 語とすることにした。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 高頻度後項動詞 10 語

表 1 は、ジャンル別の 22 後項動詞の使用頻度調査結果（延べ語数）で、表 2 は、22 の後項動詞のジャンルごとの使用率を示したものである。

22 後項動詞の全体の使用傾向を見やすくするため、表 1 をパレート図にしたものが図 1 である。図 1 は 3 つのジャンルを総合したものなので、後項動詞の使用が最も多い文学ジャンルの使用傾向に大きく影響される結果となっている。個別ジャンルの使用頻度順は、既に村田（2015, 68）の表 3 に示したので、詳細はそちらに譲るが、1 位が「だす」、2 位が「こむ」という順位は 3 つのジャンルに共通している。3 位は社会科学で「あう」が入るのに対して、他の 2 つのジャンルは「つける」が入り、4 位は 3 ジャンル共通で「あげる」、5 位は自然科学/技術・工学が「かける」、社会科学が「つける」、文学が「あう」となっていて、同じ後項動詞が上位に来ている。

次に、22 の後項動詞のジャンルごとの使用率をグラフ化したものを図 2 に示す。

図 2 を見ると、3 つのジャンルに共通して使用頻度が非常に高い後項動詞（「だす」「こむ」「つける」「あげる」等）がある一方で、使用頻度が非常に低い動詞（「とおす」「なおる」「まくる」等）があることが見て取れる<sup>4)</sup>。

上位の後項動詞の選択については、便宜上、いずれかのジャンルで使用率 5% 以上の後項動詞があれば、その後項動詞を上位語とみなすとする、上位 10 語までが含まれる。具体的には、22 後項動詞のうち、以下の 10 の後項動詞が選択された。

だす、こむ、つける、あげる、あう、かける、つく、いれる、あがる、あわせる



表2 ジャナル別の22 後項動詞の使用率

ジャンル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	あう	あがる	あげる	あわせる	いる	いれる	かかる	かける	きる	こむ	こめる
1	0.06	0.05	0.09	0.05	0.00	0.05	0.01	0.05	0.02	0.18	0.01
2	0.09	0.03	0.09	0.02	0.01	0.06	0.01	0.06	0.03	0.15	0.01
3	0.06	0.06	0.08	0.01	0.01	0.02	0.03	0.08	0.03	0.17	0.01
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
ジャンル	だす	たつ	たてる	つく	つける	でる	とおす	なおす	なおる	ぬく	まくる
1	0.18	0.03	0.02	0.05	0.10	0.01	0.00	0.02	0.00	0.01	0.00
2	0.19	0.02	0.03	0.05	0.08	0.01	0.00	0.03	0.00	0.01	0.00
3	0.21	0.01	0.02	0.06	0.09	0.02	0.00	0.02	0.01	0.01	0.00

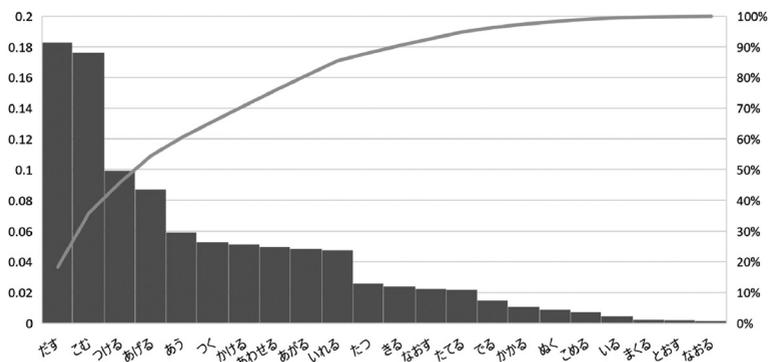


図1 22 後項動詞の使用率 (全体)

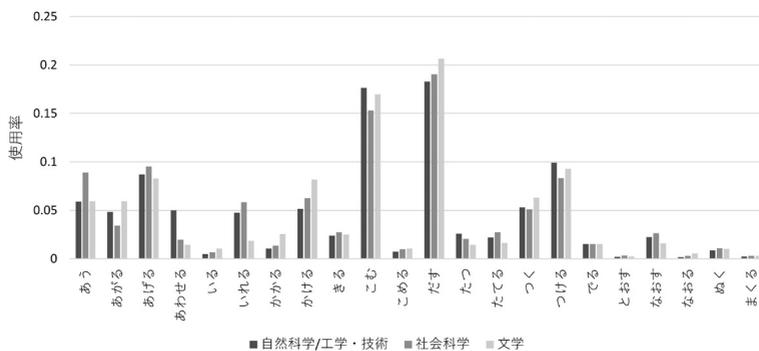


図2 ジャンル別の22 後項動詞の使用率

### 3.2 高頻度後項動詞 10 語を含む高頻度複合動詞

3.1 の結果を踏まえて、これら 10 の後項動詞を含む複合動詞をジャンル別に上位 10 語までを頻度順に並べると表 3 のようになる。

表 3 で色が付いている複合動詞は、3 ジャンルすべてあるいは 2 ジャンルに共通して用いられている語である。白黒のため見にくいですが、一見して、色付け部分が白い部分に比べて圧倒的に多いことがわかる。あえて白枠が多いと言えるのは、「こむ」と「だす」である。この 2 語は使用頻度がとりわけ高い語で、なかでも「こむ」については、村田 (2014, 82) の「こむ」の項でも触れたように、個々の複合動詞の頻度が相対的にばらけていることが特徴であった。この点は影山 (1993, 128)、姫野 (1999/2018, 59) が指摘するように、「こむ」があらゆる動詞と接続することができ、多様な複合動詞が作れることに起因すると考えられる。その結果、ジャンル間に共通して用いられる複合動詞は相対的に少なくなり、今回の結果でもその特徴が表れていると言えよう。ただ、圧倒的に使用数が多い「こむ」においても、複合動詞上位語を見ると、そのうち 2 語 (巻き込む、入り込む) が 3 ジャンルに共通し、2 ジャンルに共通する語までを考えれば、多種多様な複合動詞が含まれる文学ジャンルにおいても、10 語中 4 語 (巻き込む、入り込む、飛び込む、思い込む) が他の 2 ジャンルと共通していることがわかる。このように、複合動詞の上位語群は、ジャンルに関係なく共通して使用されていることが改めて確認された。

#### 3.2.1 3 つのジャンルに共通する高頻度複合動詞

次に、上位 10 語の複合動詞のうち、3 ジャンルに共通する語を整理すると表 4 のようになった。

先に述べたように、3 ジャンルに共通する複合動詞は、「こむ」が最も少なく 2 語で、最多は「かける」と「つく」の 6 語であった。ただ、この複合動詞群を見ると、村田 (2020, 43) でも述べたように、意味が一義で、複合動詞というより一語化した動詞として扱う方が適当だと考えられる語

も含まれていることに気づく。複合動詞として扱うべきか、一語の動詞として扱うべきかは別に議論すべき課題であるが、ここでは教育現場における指導の観点から、初級レベルの基本的語彙である「見つける」、「出かける」と、音便化した「くっつく」の3語については、一語化された語として対象から外すことにした。

表5は、後項動詞別に上位10語中3ジャンルに共通する複合動詞41語から上記3語を除いた38語の使用率をまとめたものである。また、表5をグラフ化したものが図3である。

これら38語はBCCWJの「書籍」資料の3つのジャンルに共通する高頻度複合動詞群であることから、書籍の書きことばの中で、学習者の目に触れる確率が非常に高い語群だと推測される。したがって、この38語については、ジャンルを超えた基本的な複合動詞群として優先して導入する必要があると考えられる。

ここで、ジャンル別に個別の複合動詞を見ていく。

複合動詞の使用が相対的に多くない自然科学/技術・工学ジャンルにおいて、他ジャンルとの比較で注意を引くのは、以下の語である。

持ち上げる、組み合わせる、取り入れる、取り出す、取りつける

いずれも具体的な動作を表すことができ、技術関係の文章に現れることが推測される語群で、ジャンルの特徴を反映していると言えよう。このほか、使用率自体は低いながら、「入り込む」も3ジャンルの中で最多となっている。

「取り～」の構造を持つ複合動詞は、中級レベルから増加し、「取り」が形式化した複合動詞（例 取り囲む、取り組む、取り消す、取り決める等）も多く、学習者にとって、「取り」の有無による意味の差は理解が難しい場合が多い。指導の際には、上記の高頻度語群（取り入れる、取り出す、取りつける等）を優先して導入するのがよいだろう。例えば、実験方法の

表3 各ジャンルにおける上位後項動詞10語を含む後項動詞別複合動詞上位10語

あう			あがる			あげる		
自然科学	社会科学	文学	自然科学	社会科学	文学	自然科学	社会科学	文学
1	つき合う	話し合う	1	でき上がる	立ち上がる	1	取り上げる	見上げる
2	話し合う	つき合う	2	立ち上がる	立ち上がる	2	し上げる	見上げる
3	見合う	話し合う	3	し上がる	浮き上がる	3	作り上げる	取り上げる
4	似合う	見合う	4	盛り上がる	盛り上がる	4	引き上げる	引き上げる
5	向き合う	知り合う	5	召し上がる	膨れ上がる	5	持ち上げる	持ち上げる
6	絡み合う	知り合う	6	吹き上がる	盛り上がる	6	申し上げる	立ち上げる
7	重なり合う	絡み合う	7	浮かび上がる	持ち上がる	7	積み上げる	立ち上げる
8	知り合う	知り合う	8	燃き上がる	燃き上がる	8	押し上げる	押し上げる
9	向かい合う	向き合う	9	浮き上がる	膨れ上がる	9	立ち上げる	立ち上げる
10	触れ合う	触れ合う	10	打ち上がる	燃え上がる	10	打ち上げる	打ち上げる

あわせる			いれる			かける		
自然科学	社会科学	文学	自然科学	社会科学	文学	自然科学	社会科学	文学
1	組み合わせる	見合わせる	1	受け入れる	受け入れる	1	出かける	出かける
2	混ぜ合わせる	居合わせる	2	取り入れる	取り入れる	2	見かける	見かける
3	間い合わせる	持ち合わせる	3	流し入れる	組み入れる	3	振りかける	呼びかける
4	織い合わせる	照らし合わせる	4	仕入れる	仕入れる	4	働きかける	働きかける
5	炒め合わせる	重ね合わせる	5	組み入れる	仕入れる	5	話しかける	話しかける
6	重ね合わせる	居合わせる	6	溶き入れる	取り入れる	6	追いかける	追いかける
7	盛り合わせる	理め合わせる	7	振り入れる	振り入れる	7	呼びかける	呼びかける
8	繋ぎ合わせる	考え合わせる	8	申し入れる	聞き入れる	8	投げかける	投げかける
9	考え合わせる	見合わせる	9	回仕入れる	申し入れる	9	しかける	しかける
10	照らし合わせる	結び合わせる	10	注ぎ入れる	雁い入れる	10	引っかける	引っかける

表 3 (続き) 各ジャンルにおける上位後項動詞 10 語を含む後項動詞別複合動詞上位 10 語

こむ		たす		つく	
自然科学	社会科学	自然科学	社会科学	自然科学	社会科学
取り込む	持ち込む	取り出す	生み出す	落ち着く	結びつく
組み込む	巻き込む	作り出す	作り出す	結びつく	落ち着く
入り込む	組み込む	生み出す	思い出す	くつつく	思いつく
持ち込む	追い込む	思い出す	引き出す	通り着く	通り着く
齧込む	齧り込む	引き出す	打ち出す	思いつく	張りつく
差し込む	見込む	飛び出す	飛び出す	行き着く	追いつく
書き込む	取り込む	送り出す	持ち出す	くつつく	くつつく
巻き込む	思い込む	吐き出す	飛び出す	取りつく	住み着く
飛び込む	落ち込む	呼び出す	言い出す	追いつく	染みつく
落ち込む	入り込む	押し出す	乗出す	こびりつく	張りつく

つける	
自然科学	社会科学
見つける	見つける
取りつける	結びつける
結びつける	押しつける
張りつける	張りつける
盛りつける	引きつける
巻きつける	取りつける
押しつける	突きつける
受けつける	引きつける
受けつける	張りつける
引きつける	決めつける
くつつける	投げつける
	取りつける

3つのジャンル全てに共通して含まれている語

2つのジャンルに共通して含まれている語



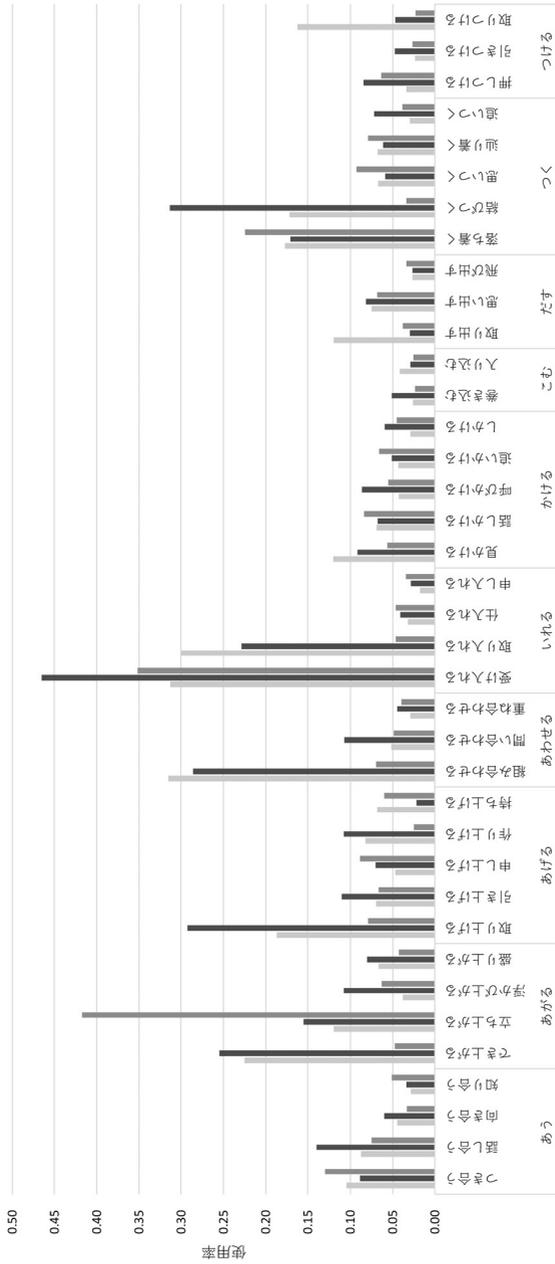
表4 上位後項動詞 10 語を持つ高頻度複合動詞で 3 ジャンルに共通する 41 語

	あう	あがる	あげる	あわせる	いれる	かける	こむ	だす	つく	つける
1	つき合う	でき上がる	取り上げる	組み合わせる	受け入れる	出かける	巻き込む	取り出す	落ち着く	見つける
2	話し合う	立ち上がる	引き上げる	間い合わせる	取り入れる	見かける	入り込む	思い出す	結びつく	押しつける
3	向き合う	浮かび上がる	申し上げる	重ね合わせる	仕入れる	話しかける		飛び出す	思いつく	引きつける
4	知り合う	盛り上がる	作り上げる		申し入れる	呼びかける			辿り着く	取りつける
5			持ち上げる			追いかける			追いつく	
6						しかける			くつつく	

表5 上位後項動詞 10 語を持つ高頻度複合動詞で 3 ジャンルに共通する 38 語の使用率

後項動詞	複合動詞	1 自然科学/技術・工学	2 社会科学	3 文学
あう	つき合う	0.10	0.09	0.13
	話し合う	0.09	0.14	0.07
	向き合う	0.04	0.06	0.03
	知り合う	0.03	0.03	0.05
あがる	でき上がる	0.23	0.25	0.05
	立ち上がる	0.12	0.15	0.42
	浮かび上がる	0.04	0.11	0.06
	盛り上がる	0.07	0.08	0.04
あげる	取り上げる	0.19	0.29	0.08
	引き上げる	0.07	0.11	0.07
	申し上げる	0.05	0.07	0.09
	作り上げる	0.08	0.11	0.02
あわせる	組み合わせる	0.07	0.02	0.06
	組み合わせる	0.32	0.29	0.07
	間い合わせる	0.05	0.11	0.05
いれる	重ね合わせる	0.03	0.04	0.04
	受け入れる	0.31	0.47	0.35
	取り入れる	0.30	0.23	0.05
かける	仕入れる	0.03	0.04	0.05
	申し入れる	0.02	0.03	0.03
	見かける	0.12	0.09	0.06
	話しかける	0.07	0.07	0.08
	呼びかける	0.04	0.09	0.06
こむ	追いかける	0.04	0.05	0.07
	しかける	0.03	0.06	0.04
	巻き込む	0.03	0.05	0.02
だす	入り込む	0.04	0.03	0.03
	取り出す	0.12	0.03	0.04
	思い出す	0.07	0.08	0.07
つく	飛び出す	0.03	0.03	0.03
	落ち着く	0.18	0.17	0.22
	結びつく	0.17	0.31	0.03
	思いつく	0.07	0.06	0.09
	辿り着く	0.07	0.06	0.08
つける	追いつく	0.03	0.07	0.04
	押しつける	0.03	0.08	0.06
	引きつける	0.02	0.05	0.03
	取りつける	0.16	0.05	0.02

\*除外語：出かける、見つける、くつつく



■ 1 自然科学/技術・工学 ■ 2 社会科学 ■ 3 文学

図3 上位後項動詞を含む高頻度複合動詞で3ジャンルに共通する38語の使用率

手順を追うような場面で具体的な動作として導入し、具体的な動作から抽象的な動作へと進め、「取り」が形式化した複合動詞の用法の説明につなげていくという方法が考えられる。

次に社会科学ジャンルについて見ると、他の2ジャンルとの比較で突出しているのは、以下の語群である。

話し合う、浮かび上がる、取り上げる、引き上げる、問い合わせる、受け入れる、呼びかける、巻き込む、結びつく、追いつく、押しつける、引きつける  
このほか、社会科学ジャンルにおける使用率が3つのジャンルの中で最多であるという点では、以下の語も高頻度語群に入れられるだろう。

でき上がる、盛り上がる、作り上げる、しかける、思い出す<sup>5)</sup>

社会科学ジャンルにおいて使用率が0.15を超える突出した複合動詞のうち、自然科学/技術・工学ジャンルにおいても使用率が高い語で、文学ジャンルにおいてはさほど使用率が高くないのが以下の語群である。

でき上がる、取り上げる、組み合わせる、取り入れる、結びつく

これらの語は、複合動詞の使用が最も少ない自然科学/技術・工学ジャンルにおいても高頻度語となっていることから、当該ジャンルで重要だと考えられるが、社会科学ジャンルにおいても頻度が高いということを考え合わせると、事象や現象などを説明する文章でよく用いられる語群だと推測できよう。

最後に、比較対象のために、文学ジャンルでの使用率が最も高い語を見ると以下の通りであった。

つき合う、知り合う、立ち上がる、申し上げる、仕入れる、申し入れる、話しかける、追いかける、飛び出す、落ち着く、思いつく、辿り着く

この中で突出しているのが「立ち上がる」で、「落ち着く」も際立っている。このほか、「受け入れる」も社会科学ジャンルほどではないが、使用

率が非常に高いことがわかった。

以上、上位後項動詞 10 語を持つ高頻度複合動詞上位 10 語のうち、3 つのジャンルに共通する語を抽出し、それらの語が各ジャンルにおいてどのぐらいの使用率を占めているのかを見てきた。この 38 語はジャンルを超えて高頻度で用いられる語であることから、複合動詞の導入では最優先される語群だと考えられよう。

### 3.2.2 2つのジャンルに共通する高頻度複合動詞

次に、同じく上位後項動詞 10 語を持つ高頻度複合動詞上位 10 語までのうち、2 つのジャンルに共通する語を抽出すると、合計で 45 語あった。このうち、意味の面ですでに一語化されていると考えられる「似合う」と、音便化した「引っかけ」の 2 語は比較対象から外すことにした。

表 6 は、上記 2 語を除いた 43 語の各ジャンルにおける使用率をまとめたもので、表 6 をグラフ化したものが図 4 である。

ここで、どの 2 つのジャンルにどのような複合動詞が共通してよく使われているのかを見ていく。

#### (1) 自然科学/技術・工学ジャンルと社会科学ジャンルに共通する語

見合う、絡み合う、重なり合う、し上げる、積み上げる、立ち上げる、照らし合わせる、考え合わせる、組み入れる、働きかける、投げかける、持ち込む、組み込む、取り込む、落ち込む、生み出す、作り出す、引き出す、行き着く、住み着く、結びつける、受けつける

#### (2) 社会科学ジャンルと文学ジャンルに共通する語

語り合う、起き上がる、膨れ上がる、燃え上がる、見合わせる、居合わせる、持ち合わせる、踏み入れる、聞き入れる、問いかける、語りかける、思い込む、言い出す、乗り出す、張りつく、駆けつける、突きつける

#### (3) 自然科学/技術・工学ジャンルと文学ジャンルに共通する語

向かい合う、飛び込む、吐き出す、取りつく

表6 上位後項動詞 10 語を持つ高頻度複合動詞で 2 ジャンルに共通する 43 語の使用率

後項動詞	複合動詞	1 自然科学/技術・工学	2 社会科学	3 文学
あう	見合う	0.05	0.06	0.01
	向かい合う	0.02	0.02	0.04
	絡み合う	0.04	0.02	0.02
	語り合う	0.01	0.02	0.02
	重なり合う	0.04	0.02	0.01
あがる	起き上がる	0.00	0.03	0.07
	膨れ上がる	0.02	0.05	0.03
	燃え上がる	0.01	0.03	0.03
あげる	し上げる	0.11	0.03	0.012
	積み上げる	0.03	0.03	0.02
	立ち上げる	0.03	0.03	0.00
あわせる	見合わせる	0.00	0.03	0.28
	居合わせる	0.01	0.04	0.09
	持ち合わせる	0.00	0.09	0.07
	照らし合わせる	0.01	0.06	0.01
いれる	考え合わせる	0.02	0.04	0.01
	組み入れる	0.02	0.06	0.01
	踏み入れる	0.01	0.02	0.13
かける	聞き入れる	0.01	0.02	0.04
	働きかける	0.07	0.08	0.01
	投げかける	0.03	0.05	0.02
	問いかける	0.02	0.04	0.03
こむ	語りかける	0.02	0.04	0.02
	持ち込む	0.03	0.06	0.02
	組み込む	0.05	0.05	0.01
	取り込む	0.07	0.03	0.01
	飛び込む	0.03	0.03	0.05
	思い込む	0.02	0.03	0.03
だす	落ち込む	0.02	0.03	0.01
	生み出す	0.08	0.14	0.01
	作り出す	0.10	0.09	0.01
	引き出す	0.06	0.05	0.01
	言い出す	0.01	0.03	0.03
	乗り出す	0.01	0.02	0.02
	吐き出す	0.02	0.01	0.02
つく	張りつく	0.02	0.02	0.04
	行き着く	0.04	0.04	0.02
	住み着く	0.04	0.02	0.02
	取りつく	0.04	0.01	0.03
つける	結びつける	0.06	0.11	0.02
	駆けつける	0.02	0.03	0.05
	突きつける	0.01	0.04	0.03
	受けつける	0.02	0.04	0.01

\*除外語：似合う, 引っかけ



上記の(1)から(3)の語群を見るとわかるように、ジャンル間で共通する語が最も多いのは、自然科学/技術・工学ジャンルと社会科学ジャンルで合わせて22語ある。次が社会科学ジャンルと文学ジャンルで17語が共通している。自然科学/技術・工学ジャンルと文学ジャンルは共通する語が最も少なく4語となっている。

次に、図4で、相対的に目を引く使用率0.05(5%)以上の複合動詞をジャンル別に見ていく。

最も突出しているのは文学ジャンルの「見合わせる」である。その次が「踏み入れる」で、「居合わせる」、「持ち合わせる」、「起き上がる」、「駆けつける」が続く。社会科学ジャンルでは、「生み出す」、「結びつける」が目を引き、それに「作り出す」、「持ち合わせる」、「働きかける」、「照らし合わせる」、「見合う」、「組み入れる」、「持ち込む」、「投げかける」が続く。自然科学/技術・工学ジャンルでは、「し上げる」が際立ち、「作り出す」、「生み出す」、「働きかける」、「取り込む」、「引き出す」、「結びつける」、「組み込む」が続く。

以上、3つのジャンルのうち、2つのジャンルに共通する複合動詞にどのようなものがあるのかを見てきた。

### 3.3 中核の高頻度複合動詞群と論述文指導に重要な複合動詞群

ここで、本稿の目的に立ち返り、中核と考えられる高頻度複合動詞群にはどのような語が含まれるか、また、大学の中上級レベルの論述文指導の場では、どのような複合動詞を優先的に取り上げるのがよいのかということについて検討したい。

まず、3つのジャンルを超えて共通して上位高頻度複合動詞に入った38語は、ジャンルによって使用傾向が異なるとは言え、使用頻度の面から日本語学習者が知っておいた方がよい中核の複合動詞群だと考えられる。

次に、大学の中上級レベルの学習者に対する論述文指導にとって重要な

複合動詞の選択をしていくが、その前に、筆者が念頭に置く日本語教育の現場の状況ならびにそれを踏まえて行う論述文指導の実際について少し説明しておく。

大学における文章指導の最終目標は、日本語学習者が論文や研究発表のための文章を自分の力で書けるようになることだと言える。そのためには、学習者が日本語の論理的な文章に慣れることが重要だと考えられる。実際、筆者の経験でも、学習者は、日本語の論述文をできるだけ多く読み、文章構造を分析する練習を積むことによって、日本語による論理展開の流れに慣れ、論述文でよく用いられる文型、語彙、表現、文体を適切に選ぶことができるようになっていく。学習者が読む論述文は、学習者が論理的な文章を書く時のモデルになり得るため、教師側はどのような文章をモデルとして選ぶかにも注意を払う必要があると考えられる。モデルとする文章については、学習者自身の専門分野のものを用いるのが理想的だと言えるが、一般的に大学の教室に集まる学生の専門分野は様々で、個別対応は難しいのが実情である。

この状況を前提とする日本語教育の現場では、中上級レベルの教科書の読解教材を見てもわかるように、多くの学生がそのテーマに関心を持ちやすく、学びながら日本社会に関する知識を得ることもできるという意味で、社会科学ジャンルの文章が用いられることが多いように思う。この社会科学ジャンルの文章は、文章指導の観点からも利点があり、文学作品などに比べて、その論理展開の流れが言語要素の面で相対的に可視化されやすいと言える。歴史、経済、法律、政治、社会等に関する文章から、時事的な新聞社説に至るまで、社会科学ジャンルの文章が中上級レベルの教育現場で多く取り上げられるのは自然な流れだと考えられる。

では、自然科学/技術・工学ジャンルの文章についてはどうだろうか。

このジャンルは、数学分野をはじめとして、論理展開が言葉に頼らず数式で示されることが多い。その意味では社会科学ジャンルより、一層厳密

かつ緻密な論理性が求められ、同時にその論述は客観的かつ簡明になると言え、論述文のための最大公約数としての複合動詞が現れていると推測される。実際、筆者が以前に担当していた理工学研究科の院生対象の中上級レベルの授業では、院生自身が希望する論文を教材として扱っていたが、分野によっては数式と言葉による短い論述で、日本語は数式をつなぐ最小限の利用となっていて、その表現自体も非常に単純なものの繰り返しということもあった。複合動詞では、「成り立つ」が頻繁に用いられていた。

BCCWJの「書籍」資料は、論文以外のより広い範囲の文章が含まれているが、それでも自然科学/技術・工学ジャンルは、他の2つのジャンルに比べて論理性が高い文章が多く含まれていると考えられる。自然科学/技術・工学ジャンルに現れた複合動詞の数を見ると、村田(2020, 34)で報告したように、文学ジャンルの複合動詞総数約128000語に対し、自然科学/技術・工学ジャンルが約26000語、社会科学ジャンルが約37000語となっていて、最も少ないことがわかる。複合動詞そのものの使用が非常に少ないジャンルにおいて、高頻度で現れる複合動詞群は、そのジャンルにとっては重要な複合動詞群だと言ってよいだろう。

今回の調査で、2つのジャンルに共通する高頻度複合動詞群というのは、その2つのジャンルに共通した特徴を有した語群だと考えられる。特に、緻密な論理展開が求められる自然科学/技術・工学ジャンル、ならびに社会科学ジャンルの2つに共通する複合動詞は、論述文を書く際に重要な複合動詞群になると推測される。

実際、上記の(1)と(2)を比較すると、(2)は「起き上がる」「思い込む」「乗り出す」「駆けつける」など、より日常的な生活場面で使われる臨場感のある語彙が多く含まれているのがわかる。論述文というのは、執筆者が結論に向かって自らの思考の過程を言葉で説明していく文章であり、言葉による論理展開が矛盾なく結論につながるかが問われる抽象性の高い文章であることを考えると、そこに生活場面の臨場感あふれる複合動詞が

現れることは読み手にとって違和感でしかなく、むしろ極力避ける必要があると言ってよい。その観点から見ると、(1)には(2)のような日常の生活語彙が含まれていないと言えよう。

以上の考察を踏まえて、論述文指導に必要と考えられる複合動詞を以下のような手順で選択した。

まず、本稿で高頻度複合動詞として選択されたものを基本として、それに社会科学ジャンルと自然科学/技術・工学ジャンルの2つのジャンルに共通して現れた高頻度複合動詞群を加えたものを論述文作成に重要な複合動詞群として選択する。これらの複合動詞群は、使用頻度を指標に優先的に導入したほうが良いと考えられる語群である。しかしながら、後項動詞の機能はそれぞれ固有なので、使用頻度が高なくても、論述文指導に必要だと考えられる複合動詞は存在すると考えられる。

そこで、次に上位後項動詞10語に入らなかった残り12の後項動詞を持つ複合動詞の中で、社会科学ジャンルと自然科学/技術・工学ジャンルに共通する特徴的な複合動詞を上位10位までの語に限って見ることにした<sup>6)</sup>。

残り12の後項動詞にはそもそも使用頻度が非常に少ない語があり、自然科学/技術・工学ジャンルの語を基準とすると、「とおす」「なおる」「まくる」の使用総数はそれぞれ53語、38語、57語となっていて、使用頻度30回以上の複合動詞は0語となる。そのため、「とおす」「なおる」「まくる」については、使用頻度20回までとして見たところ、「とおす」は「見通す」が21回、「なおる」も「立ち直る」が21回で、使用率が1語で5割前後となる相対的に頻度が高い複合動詞であることがわかった。一方、「まくる」は最高頻度が4回の「追いまくる」、「吹きまくる」、「押しまくる」の3語で、使用がばらけていることから対象から外すことにした。なお、音便形の「引っかかる」も1語化した語として対象から除外してある。

このように、「まくる」を除いた11後項動詞を持つ複合動詞で、上位10語までの複合動詞のうち、使用頻度30回以上の複合動詞を対象にして

表7 非上位語 11 後項動詞を含む使用頻度 30 回以上の複合動詞の使用率  
(但し「とおす」「なおる」は使用頻度 20 回以上)

後項動詞	複合動詞	1 自然科学/技術・工学	2 社会科学	3 文学	
いる	立ち入る	0.28	0.40	0.07	
かかる	取りかかる	0.23	0.19	0.09	
きる	仕切る	0.09	0.04	0.05	
	乗り切る	0.08	0.08	0.02	*
	踏み切る	0.07	0.13	0.02	*
	断ち切る	0.06	0.06	0.05	
	閉じ込める	0.33	0.24	0.30	
こめる	成り立つ	0.53	0.70	0.11	
たつ	飛び立つ	0.05	0.06	0.09	
	思い立つ	0.05	0.05	0.08	
	組み立てる	0.25	0.14	0.03	
たてる	見立てる	0.09	0.05	0.02	
	仕立てる	0.07	0.05	0.04	
でる	届け出る	0.13	0.22	0.02	*
	申し出る	0.13	0.25	0.11	
	にじみ出る	0.08	0.07	0.06	
とおす	見通す	0.40	0.39	0.28	
なおす	見直す	0.31	0.39	0.06	
	やり直す	0.09	0.06	0.05	
なおる	立ち直る	0.55	0.55	0.21	
ぬく	引き抜く	0.25	0.08	0.26	

除外後項動詞：まくる 除外語：引っかかる

\*文学ジャンルでは上位 10 語に入っていない語

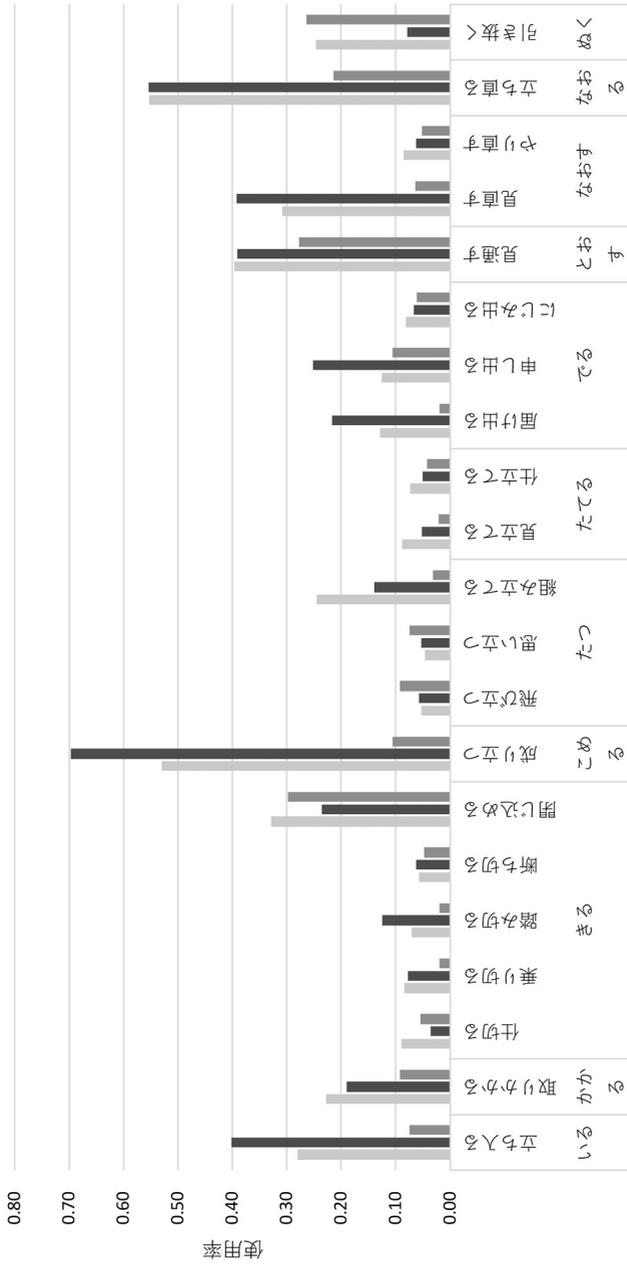


図5 非上位語 11 後項動詞を含む複合動詞の使用率

(但し「とおす」「なおる」は20回以上の語)、自然科学/技術・工学ジャンルの語を基準に社会科学ジャンルと共通する複合動詞を抽出し、その使用率を文学ジャンルにおける使用率と比較できるように整理したのが表7である。表7をグラフ化したものが図5になる。

図5を見るとわかるように、2つのジャンルに共通して相対的に頻度の高い複合動詞が存在する。これらの複合動詞の中で、便宜上、自然科学/技術・工学ジャンルと社会科学ジャンルの2ジャンルで使用率が0.1(1%)を超え、共通して文学ジャンルに比して頻度が高い語を選択すると、以下のようになる。

立ち入る、取りかかる、成り立つ、組み立てる、届け出る、見通す、見直す、立ち直る

このうち、「見通す」は1語で後項動詞「とおす」の使用総数の40%、「立ち直る」は1語で後項動詞「なおる」の使用総数の55%を占めていた。このほか、「乗り切る」、「踏み切る」も文学ジャンルに比して頻度が相対的に高いことがわかった。

#### 4. 文章指導に重要だと考えられる高頻度複合動詞リストの提案

上記の考察を踏まえて、中上級レベルの文章指導で、優先して導入あるいは確認しておくべき必要があると考えられる複合動詞群を以下にリストとして挙げる。

##### 1. 中核的な高頻度複合動詞群 38 語：

###### 3つのジャンルに共通する高頻度複合動詞

あう　　：つき合う、話し合う、向き合う、知り合う

あわせる：組み合わせる、問い合わせる、重ね合わせる

あがる　：でき上がる、立ち上がる、浮かび上がる、盛り上がる

あげる　：取り上げる、引き上げる、申し上げる、作り上げる、持ち上げる

- いれる : 受け入れる、取り入れる、仕入れる、申し入れる  
 かける : 見かける、話しかける、呼びかける、追いかける、しかける  
 こむ : 巻き込む、入り込む  
 出す : 取り出す、思い出す、飛び出す  
 つく : 落ち着く、結びつく、思いつく、辿り着く、追いつく  
 つける : 押しつける、引きつける、取りつける

## 2. 大学の論述文指導の観点から導入が優先される複合動詞群 53 語

- あう : 話し合う、見合う、絡み合う、重なり合う  
 あわせる : 問い合わせる、組み合わせる、照らし合わせる、考え合わせる  
 あがる : 浮かび上がる、でき上がる、盛り上がる  
 あげる : 取り上げる、引き上げる、持ち上げる、作り上げる、し上げる、  
           積み上げる、立ち上げる  
 いれる : 受け入れる、取り入れる、組み入れる  
 かける : しかける、働きかける、呼びかける、投げかける  
 こむ : 巻き込む、入り込む、持ち込む、組み込む、取り込む、落ち込む  
 出す : 取り出す、生み出す、作り出す、引き出す、思い出す (初級レベル)  
 つく : 結びつく、追いつく、行き着く、住み着く  
 つける : 押しつける、引きつける、取りつける、結びつける、受けつける

〈追加語 8 語 : 高頻度語ではないが論述文指導に必要な語として〉

- 立ち入る、取りかかる、成り立つ、組み立てる、届け出る、見通す、見直す、  
 立ち直る

## 5. おわりに

複合動詞の使用頻度調査を始める以前は、複合動詞と聞くと、臨場感を醸し出す動詞、例えば「駆け込む」、「あふれ出す」、「居合わせる」、「書き直す」、「しゃべりまくる」など、日常生活や小説に現れるような複合動詞がまず頭に思い浮かんだ。しかし、理工学研究科で中上級レベルの学習者

を相手に文章指導を行ううちに、論述文にもよく使われる複合動詞群があることに気づき、いつかそれを使用頻度に基づいて抽出したいと考えてきた。今回の調査では、まず、3つのジャンルを超えて頻度が高い複合動詞群として38語を選択した。次に、その38語に社会科学ジャンルと自然科学/技術・工学ジャンルに共通して現れる複合動詞群を加えて、論述文指導で優先されると考えられる複合動詞群53語を選択した。今後は、このリストに基づいて、教室現場で実際にどのように導入し、自然に使えるようにしていくかを複合動詞ごとに考えていくことが課題となる。

振り返ると、複合動詞の使用頻度調査を始めたのは2012年で、当時、共同研究でお世話になった山崎誠先生（現国立国語研究所，研究系，名誉教授）にBCCWJの試用版（モニター版）が使用可能だと教えていただいたことがきっかけで、先生のご協力を得て、大規模コーパスを用いた調査を始めることができた。筆者は、それ以前は文型を指標として文章のジャンル判別の分析をしていたため、大規模コーパスには強い関心があり、複合動詞ではBCCWJを用いた使用頻度調査がしたいと考えていた。ちょうど同じ時期に、故姫野昌子先生（東京外国語大学名誉教授）から複合動詞辞典の編纂の仕事を依頼され、それが使用頻度調査を続ける励みにもなった。その複合動詞辞典は2023年夏に『日本語複合動詞活用辞典』として研究社から刊行された。今後、日本語学習者が用例を調べる時に大いに役立つと期待される。

## 注

- 1 姫野（1999）は新版が姫野（2018）として研究社から刊行されているので、引用ページについては併記した。
- 2 書籍データの詳細については山崎（2009）を参照されたい。
- 3 村田（2023, 63）の注3に修正についての詳細を記したが、修正が19万余語中数語のため、誤差の範囲だと考えられる。
- 4 後項動詞の使用頻度が相対的に低くても、実は、論述文指導には重要だと考えられる複合動詞は存在する。例えば、「なおす」は上位後項動詞10語には入らないが、複合動詞「見直す」は、2つのジャンル（自然科学/技術・工学と社会科学）で上位1位の語であり、使用率はそれぞれ自然科学/技術・工学で176/572（31%）、社会科学で377/961（39%）で、文学ジャンル129/2013（6%）と圧倒的な差がある。

- 5 「思い出す」は、先に対象語から外した「見つける」「出かける」と同様、初級レベルで通常一語化した動詞として導入される語である。姫野（1999/2108, 93-95）では後項動詞「出す」の意味特徴のうち、顕在化を意味する「顕現」の動詞として分類されている。「思い出す」は、他の意味特徴である「創出」（作り出す、生み出す等）、「発見」（見つけ出す、探し出す等）の語との比較時に必要な語となるので、対象語に含めた。
- 6 村田（2016, 122-129）の表を参照されたい。

#### 参考文献

- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 姫野昌子（2018）『複合動詞の構造と意味用法』研究社
- 山崎誠（2009）「代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築」『人口知能学会』24（5）、623-631
- 村田年・山崎誠（2012）「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 40, 83-112
- 村田年（2013）「社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 41, 67-95
- 村田年（2015）「文学書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 43, 61-80
- 村田年（2016）「BCCWJを用いた複合動詞使用頻度調査表の改訂—22 後項動詞を指標として—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 44, 115-131
- 村田年（2020）「BCCWJに現れた複合動詞「押しつける」—自然科学系（含技術・工学）ジャンルと社会科学ジャンル—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 48, 31-54
- 村田年（2021）「BCCWJに現れた複合動詞「押しつける」2—文学ジャンル—」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 49, 55-79
- 村田年（2022）「ジャンルによって異なる複合動詞の種類—小規模コーパスと 22 後項動詞を用いた計量分析—」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 50, 101-114
- 村田年（2023）「BCCWJに現れた統語的複合動詞「～つける」—实例を踏まえた指導法を目指して—」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 51, 37-64

#### 謝辞

使用頻度調査の最初の段階でデータの整理に関してご協力いただいた大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所名誉教授の山崎誠氏に心より感謝の意を表します。